
新 “ネギまと転生者”

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新“ネギまと転生者”

【Zコード】

Z7264Y

【作者名】

大喰らいの牙

【あらすじ】

これは、以前『ネギまと転生者』を新しくして、一からやり直したもののです。

物語は原作開始の約1000年前から始まります。

アンチになるかどうかは書いていかないと分からぬですが、原作ブレイクにはなります。

始まり（前書き）

これは以前上げた“ネギまと転生者”を一新にした作品です。

物語の始めは原作開始から約1000年前からの始まり、つまり、魔法大戦前からのお話です。

主人公は変わらずの“蒼騎 真紅狼”ですが、生い立ちや能力を多少変更しております。

始まり

「いやー、起きたーー！」

「九月一日？」

頭を杖で叩かれた……
硬い所に当たつて凄い痛い。

「おはようございます。」

「神様が居るといいじゃ」

「ようやく状況に追い付いてき

「えっとじゃあ、アンタは神様なのか？」

「で、およつからばつかし記意が吹つ飛んで一あんごが、俺はなんで

「ここに困るんだ？」

「…………お主の体の中に存在してゐるモノが危険だつたため、超法規的措置によりお主を殺したんじや」

「アーティスト」

いきなり言われてもそれは困るな。
いや、マジで。
取り敢えず、前向きに生きるか。

「で、殺した理由は分かつた。その他に用があるんだろ？」

「うむ。神様の中にもルールがあつてな。お主の場合特別だつたんじやが、基本神様つて言つのは、人間界に触れないようにしてるんじや。だが、儂より下の下級神様……所謂、『見習い』がたまに“うつかり”人を殺してしまつ時があるのじや。そうなつてしまつた時に、その者達を転生させるんだが、何故かマンガの世界に転生させるのが流行つておつてな、その世界に生きる為にチートになつて転生させておるのだ」

ふーん？ 神様業界つてのも大変なんだな。

一つ氣になつっていたので聞いてみた。

「神、アンタさつき“儂より下”つて言つてたけど……位高いの？」

「儂はこれでも最高神じや。といつても、本当に人間界には触れておらんぞ？ お主のような例外以外とかはな。本来はそういう部署があるのでそちらに一任しておるのじや」

「色々あるもんだ。……ん？ ということは俺もマンガの世界に転生するつてことか？」

「まあ、そうじやな」

転生か…… 人生なにがあるか分からぬものだな。

「一応聞くけど、行き先は？」

「今だと……『ネギま！』という世界らしい。まあ、ファンタジ

「じゃな

「ファンタジーってことは“魔法”とか?」

「その解釈で間違つてないな。まあ、餞別代りにそれなりの特典付けてやるぞ? しかし、お主は何故か、その『ネギま!』の魔法が使えないらしい」

「何故に?」

「そういう体質らしいの……」

「そつかー、体質ならしかたがないよねーー」

「HAHAHA!—（。。。）」「

「気にしろよ!—」とか言われそうだけど、無視しよう。

深く関わっちゃいけない気がする。

「んじゃあ、FF5と6（アドバンス）の魔法と青魔法、暗黒魔法が使って、さらには召喚獣は6ので。あとはKOFのオズワルドの“カーネフル”だろ、鋼殻のレギオスの“鋼糸”の技と剣技を全部で“剣”的量はアルシェイラと同じぐらいで。あとは戦国BASARAの“前田 慶次”、“長曾我部 元親”、“織田 信長”的最終武器で、ただし、慶次の武器だけ“第七武器”も付けてくれん、アレを使ってみたかったんだよね。D.Gray-manのクロス・マリアンの“断罪者”を。最後に、メルブラの“蒼崎 青子”的マジックガunnerと“軋摩紅摩”的灼熱をでいいッス”

「随分とまた付けたな。まあいいだろ? そつしておこひ。そうじや、こちらの特典みたいなものなんじゃが……“直死の魔眼”と『七夜』の体術、そして不老不死が付いてある

「なんでもた?」

「こつしないとお主の体が耐えられないらしい。お主の体の中の存在が原因らしい」

「ふ〜〜ん？ まあ、貰えるモノは貰つておへよ。あとで、ひょっとした改造をしてもらつてもいい?」

「内容によると、言つてみる」

「いや、『蒼崎 青子』のマジックガンナーでFFの魔法も撃てるようになります」とと『断罪者』の弾丸もFFの魔法を込めた“魔法弾”を追加して欲しいのと、俺用の色に変えて、『断罪者』から別の名に変えることなんだけど…………」

「まあ、いいだろ。そういう手配しておくれ。ああ、注意点だ」

「んーー？」

「不老不死じゃが、体に馴染むまでは一年ちょっとかかるから、その間気を付けることじや」

「分かった。んじや、世話になつたな神」

「飛ばされる時間軸は、約1000年前からじやから、貰つた能力の研鑽にでもあてるのじやな」

「うー」

そつ返事すると、次第に足元から薄くなつていった。
そつして、俺は意識を失つた。

「せひばじや

蒼騎 真紅狼よ」

始まり（後書き）

新しくなつて、やり直しました！

以前“ネギまと転生者”を読んでくれていた皆さまがまた付き合つて頂けたら嬉しい限りです！！

次回はキャラ設定です。

キャラ設定

キャラ設定

主人公 蒼騎 真紅狼 《あおき しんくろわ》

年 今現在 20歳

身長 175cm 180cm

体重 61kg 65kg

誕生日 4月29日

容姿は鋼殻のレギオスのリンテンスをイメージ。だが、無精髭は無いし、煙草も吸わない。ただ、眼の色は真紅。

裏設定

両親は一人とも他界している。10歳の時に交通事故により死亡。その後、10年間一人で切り盛りしながら、暮らしているが20歳の時、神に超法規的措置により殺されて、能力をもらい転生する。

能力

能力は基本的に“ネギまと転生者”と一緒にですが、ちょっとばかり能力の入れ替えをしました。

昔は

BLAZBLUE CSのハザマの能力、“碧の魔導書”を保有。
武器 一本のバタフライナイフ ドライブは『ウロボロス』

KOFのオズワルドの戦闘術 “カーネフェル”を使える。
武器 トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の剣技も
使用可能）

武器 リンテンスの鋼糸と刀の天剣

戦国BASARA2の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。
各武将によって、「吸收・半減・無効・弱点」できる属性がある。

FF5の暗黒魔法と6の魔法、青魔法+召喚獣が使える。

『七夜』の体術と“直死の魔眼”が使える。

『紅』の“崩月流”と角あり。

そして、不老不死。

でしたが、“新ネギまと転生者”ではこうです。

KOFのオズワルドの戦闘術 “カーネフェル”を使える。
武器 トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の剣技も
使用可能）
武器 リンテンスの鋼糸と刀の天剣

FF5の暗黒魔法と6の魔法、青魔法+召喚獣が使える。

戦国BASARA2の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。
各武将によって、「吸收・半減・無効・弱点」できる属性がある。

前田慶次
吸收 風 半減 地 無効 雷 弱点 炎

長曾我部元親

吸收 炎

半減 雷

無効 水

弱点 地

織田信長

吸收 閻

半減 炎

無効 地

弱点 光

不老不死。
までは一緒です。

ここからが新しい部分です。

メルブラ

“蒼崎 青子”の通称『マジックガンナー』の能力が使える。

破壊特化

“ 軋間 紅摩 ” の灼熱

鬼の肉体

D . G r a y - m a n

クロス・マリアンの主武器である“断罪者”
ちなみに“断罪者”は真紅狼verに変えます。
以上です。

減つたのは、“ハザマ”的能力と、BASARA2の“伊達 政宗”と“真田 幸村”的武器と技、そして『紅』の“崩月流”です。

結構“魔術”ようにしてみました。

最後にアンケートなんですが……

“断罪者”真紅狼verについて、なにか良い名前はありませんか?

あと、配色やどんなモデルなどもなんですが……

原作のクロスの“断罪者”は銃身に十字架のデザインがありました
が、真紅狼はどのようなデザインがいいですか?

ご意見お待ちしております。

キャラ設定（後書き）

出来たら、今日中にもう一話上げたいです。

そして、アンケートの方よろしくお願いします！！

意外なお友達・・・

『真紅狼 sides』

目が覚めたら、大森林の中に居た。

いや、冗談無くマジで。

取り敢えず、体が自由に動くかどうか確かめてみたら、ちゃんと動いた。……………というより、以前よりも軽やかに動く。

不意にポケットの中に何か紙らしきものが入っていたので取り出してみるとこう書かれていた。

『真紅狼へ

お主が目を覚めた時にはこれを読んでいるだろ。お主が居る場所は“魔法世界”と呼ばれる場所で地球ではない。そこは本来の火星の表面に“上乗り”させた状態の“魔法世界”じゃ。地球に行きたかったら、その世界にある“ゲート”を使えば、行ける様になつておる………覚えといてくれ。最後にこれを消しといてくれ。

『神より』

ここは火星なのか〜。

初めてだ、転生していきなり地球以外の星に降り立つなんて………取り敢えず、メモは消去つと。

『ファイア』

ボツ！

指先から小さな炎が出て、メモを燃やした。

「さて、体が不老不死になるまで貯った能力の把握と力を馴染さねえとな……」

そこから、俺は長い年月をかけて、力を体に馴染ませた。

キングクリムゾン！！

軽く201年はすっ飛ばす！！

はい、真紅狼だ。

今、年は221歳だ。

最初の一年は大人しく隠れ住んでいたよ。

大森林の奥にそれなりの城が在ってな、そこを拠点にしてた。周りは自然が創った石壁とかだったから、人はまず来れないし、猛獸が来ようとしても他の強者がうろついてるから、そちらも問題は無かつた。

その後、体が不老不死になつて、力も馴染んだ後、周りに居る猛獸共と殴り合いしてた。

いや、凄いんだよ。

人じやないのに魔法障壁張つててさ。

魔獸パネエ……

で、殴り合つた後何故か仲良くなつた。

意志疎通がそれなりに出来るようになつて、まあ、楽しく過いじつて
いたよ。

今日は「」の森に住んでいる猛獸（友人）たちを集めた。

「話があつてな。ちょっと世界を見て回つてくるから、その間留守
を頼みたいんだよ」

まあ、「イツ等に言つても人語で返事が返つてくる筈ないのだが、
そこは長年住んでいる者達の「」で返事が返つて來
た。

「「「「」」」

「どうやら、良い返事だつたらしい。

「じゃあ、行つてくるから……後を頼むぜ？」

森を出ようと外に向かおうとしたら、一匹の若い竜が首を垂らして、
「乗れ」と言つて居るみたいだったのでそいつに乗つて森を出た。

「懶々、見送り有難うな」

「……グルルウ」

「おひ。またな」

ブアア！

俺を乗せた若い竜は数少ないやり取りをしたあと、再び森の中に去つていった。

そこから、街のある方に歩き始めた。

情報を収集しながら、街の名前などを覚えたりした。

どうやら、俺が居た森は、エリジウム大陸の“ケルベラス大森林”と呼ばれる場所だつたらしい。

その他にも、自由交易都市“グラニクス”や魔法学術都市“アリアドネー”、共和国“メガロメセンブリナ”それに対立する大帝国“ヘラス”、そして、この世界が出来た当時に創られた王国“オスティア”などがあるらしい。

そして今現在、俺はその“オスティア”に居るんだが、浮いてるんだ土地が。

浮遊国かよ、いー。

とまあ、歩いていたら何かダンジョンっぽいところに来てしまったんだが、何ココ？

取り敢えず、俺を後ろから見ている黒いフードを被つてる人に聞こう。

「なあ、アンタ。ここがどこか分かるか？」

「…？」

そう問い合わせると姿を現した。

……結構出来そうだな。

「貴様、何者だ？」

「真紅狼 side out」

「? ? ? side」

私はいつも、ここから望遠鏡を使って墓守りの宮殿を覗いていた時、人の気配がしたのでフードを被り、気配を消して近づくと妙な感じがした。

この世界の者でもなく、ましてや「人間」でも無い存在だった。そこに不意に声を掛けられた

「なあ、アンタ。ここがどこか分かるか？」

「!？」

気配はちゃんと消していた筈なのに、いつどこで分かつたのか？と自問自答していたが、答えることにした。

「貴様、何者だ？」

「あらら、俺は“場所”を聞いてるのに、そちらは“名前”を訪ねるのかい？」

「もう一度、聞く。貴様、何者だ？」

「人の名を聞きたいなら、自分から名乗れ。それが出来ないなら、俺はお前を無視するし、答える気も無い。邪魔したな……」

そういうと彼は去つていこうとしたので、私は必死に引きとめた。

彼の腰にしがみつきながら、必死に引きとめた。そうすると彼は突然のブレイクに驚きながらも、止まってくれた。

よかつた～。

「えーっと、名前は？」

「えっと、レーネ・アルカディアと言います。 “造物主”とも呼ばれていています。貴方のお名前はなんて言うんですか？」

「蒼騎
真紅狼だ」

「蒼騎 真紅狼さんですか…………、“旧世界”の方ですか?」

「えつとですね。いきらの世界を“新世界”といい、“ゲート”的な側を“旧世界”と言つてます」

「じゃあ、一応旧世界出身だな」

何か含みのある言ひ方ですが、触らない方がいいですね。

「それでですね。初対面の方にこんなこというのもどうかと思つた
ですが、私と友人になつてくれませんか！？」

「別にいいぞ？」

「いいんですか！？」

「うん、まあ。何か困ることもあるのか？」

「いや、だつて、皆、私の正体を言つと逃げたり、怯えたりするの
で……」

「俺はそんなの知らんし、関係無いね。うへへん、呼び名は“レー
ネ”でいいか？ ちょっと安直過ぎるが……」

「じゃあ、私は“真紅狼”つて呼びますね！」

「おう。よろしくな、レーネ」

「はい。よろしくです。真紅狼」

「で、レーネ、頼みがあるんだがいいか？」

「なんですか、真紅狼？」

「俺、“旧世界”に行きたいんだが、“ゲート”を開いてくれない
か？」

「え？ うへへん、まあ、良いですよ」

そういうて、真紅狼をゲートまで案内してゲートを開いた。

「また、逢おう、レーネ」

そう言って、真紅狼は消えた。

「はい。また、いつか
ソーネ side out」

とまあ、ゲートで移動したんだが目覚めたら、多分日本（？）の土
地の関東に居たんだよ。

意外なお友達・・・（後書き）

はい、いきなりキャラブレイクです。

造物主はフードを被ると威厳が出ますが、脱ぐと普通に少女です。あと、レーネにはもう一人の人格者がいますが、それがライフメー カーです。

つまり、レーネの体を借りることで現界出来るわけです。条件は『フードを被ること』です

そして、この当時はまだ、セクトウム達は居ません。創られておりません。

キャラブレイクに「ええ～～～～！」という方も居るかもしれません

せんが、それが狙いだつたり（笑）

話の進みが早いと感じてしまいますが、魔法大戦時に長ーくやりそ うなので、パパッと進めます。

また、キャラの構成が出来ましたら、載せます。

お次は、あの人登場。

真紅狼と吸血姫（前書き）

連日投稿だ――――――

「真紅狼 sides」

「どうやら、ここは“麻帆良”という土地らしい。

調べてみると、それなりに靈脈やら魔力のパイプラインがあるので、この土地を丸ごと俺が買い取った。

というより、そこを治めている領主に頼んだら、すんなり土地を分けてもらつた。

「貰うの無理じゃね？」とか思う人が居るかもしれないが、いやね？ 転移した後、人が襲われていたから助けたら、こここの領主の娘さんだつたらしく、その後家まで、送つてあげたんだよ。そしたら「お礼がしたい」つていうから、「じゃあ、土地をくれ」つて言つたら、「どうぞ、好きなだけ貰つてください……」と言つたから、「“麻帆良”という土地を全部くれ」つて一言返事で分けてもらつたのさ……！

と言つわけで、今、俺は家を建ててている。
かなり奥の方に創つた。

武家屋敷だが、火事や自然災害などになつても崩れない特殊な造りにしてあるので大丈夫だ。ついでに奥行きがある家にしてみた。門までしつかりとした物を造つてある。

門をくぐると大きな屋敷が見えるんだが、そこは客人用みたいなもので、母屋はさらに奥に造つた。
あまり、人目につかないようなに場所に造つてある。
なんせ“魔法”とか使うしね。

その後、俺の所有している土地全体を封印した。
これから世界を見て回るし、勝手に入られても困る。

俺の土地に入らうと近づくと、急に違つ事を思い出したように遠ざかっていくような精神干渉のよつた結界を張つた。

ただ、これは俺が許可した人達はすんなりと入れる。

まあ、今のところ一人もいないけどね！

「さて、欧洲辺りに行つてみると……」

俺は召喚獣を呼び出した。

呼んだのは“ジャンプ”でおなじみの『ケーツハリー』

俺はすぐさまケーツハリーに乗り、欧洲に行つてみると……冬でした。

「雪が降つてゐる…………まあ、冬なら当然か

ケーツハリーに茂みが多い所に行つてもらい、そこで降りた。

そこから、俺の世界と同じの“欧洲”のか歩き回つた。

だいたい、約204年ぐらいの月日をかけたよ…………

ということで今俺は445歳だ。

見て回つた結果は、全く同じだった。

冬の時期にドイツに行つて麦酒を飲んだんだが、うめー、麦酒マジうめー。

つーか、この時代つてまだ城とかあつた時代なんだよなあ。

で、もう夜です。

最悪野宿になるかなあーと思つていたら、無人の小屋があつたからそこに今夜は泊ることにした。

ちかくに湖があつたから、そこで魚と水を採つて、森からは竹を探した。

二、三本を持って帰り、即席の皿と箸、コップを造つた。

火をおこし、魚を焼いて、真水を煮沸させた後、食事をした。

その時、近くで「ガサツ！」という物音がしたので、そこに行つてみると裸足で走つて来たと思われる小さな女の子がいた。

「えーっと、どうしたんだ？」

「……………」

困つた。じーっとこちらを見てくるだけで、喋つてくれないのは困る。

その時、その女の子の腹から「ぐっぐっ」という音が聞こえたので…

…

「…………食べるか？」

「…………（口クン）」

「よし、ちょっと待つてね」

魚を調達しに行き、その場で内臓を取り出して綺麗に洗い、じつくり焼いた後その子に渡して上げた。

「アツいから、気をつけて食べるんだ。あと骨にも血をつけてな」

「……………ありがとうございます」「いいえ、どういたしまして」

よほど腹が減っていたのか、三匹採つて来た魚の内、一匹を食べてしまつていた。

そして、腹が満たされた後、女の子はこちらを見て口を開いた。

「食べさせて有難う」ぞ」
「私はエヴァンジエリン・アタナシア・キティ・マクダウエルとします。そして……………」「俺の名は蒼騎 真紅狼だ。言いたくなかったら言わなくてもいいぞ？」

「……………そして、私は吸血姫です」

いやはや、「イツは参つたね。
真紅狼 side out」

「エヴァア side」

明日は私の誕生日で、城の中に居るメイド達は明日の為の準備に忙しかつた。

明日の誕生日を楽しみながら、ベッドに入り寝ていたら、急に体が熱くなつたのを感じたので起きてみると、私の部屋に変な男が居て、なにやら歓喜していた。

「やつた！ 俺は実験は成功だ！」「ねえ、私の体に何をしたの！？」

「キミはねえ、もつ人間じゃないんだよ！ 人の血を啜り、永遠を生きる“吸血姫”になつたのさー！」

「…………え？」

私は“人”じゃない？

地面をみてみると、先程まで生きていた筈の父と母が首から血を流し、息絶えていた。

私は自分が何をしたのか、分からなかつたが、この男を殺してやりたいという気持ちはあつた。

男は背を向けながら歓喜していた……

地面にあつたナイフをそつと持ち上げて、その男の背中を刺した。

「…………！？ があーー！」

男は倒れた後、私は城を出て、ただ、ひたすら走つた。

その時、森の中から煙が上がつていたので、そこに向かつてみると、一人の若い（？）男が焼き魚を食べていた。

こつそりと移動しようとしたが、その時に不意に物音を出してしまい、その男が近づいて來た後、お腹から「ぐーー」という音を出してしまつた。

そしたら、男の人気が新しく魚を採つてきて、焼いて私に渡してくれた。

「アツいから、氣をつけて食べるんだ。あと骨にも氣をつけてな」

「…………ありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

この人は見知らぬ相手なのに、一瞬まで優しいのが分からなかつたが、今は食べることに集中した。

お腹がいっぱいになつたので名乗ることにした。

「食べさせて有難うござります。私はエヴァンジエリン・アタナシア・キティ・マクダウェルと申します。そして…………」

「俺の名は蒼騎 真紅狼だ。言いたくなかったら言わなくていいぞ？」

「…………そして、私は吸血姫です」

あの男が言つていたことを言つてみた。

私も“吸血姫”がなんのか位は本で知つていた。
死ぬこと無く、人の生き血を啜る、化物

「この人もどうせ、私を恐れるんだろう」と思つていたんだが、反應は違つた。

「へえ～～、この時代にも吸血姫つているんだ」

「…………へ？」

「ん？ どうしたんだ？」

「え、えと、私、吸血姫ですよ？ 人間じゃないんですよ？ 怖くないんですか！？」

「いや、俺の方が結構化物だと思つぞ？」

「…………はい？」

「俺、不老不死だし。鬼だしなあ」

「えと、失礼ですけど何歳ですか？」

「今年で445歳」

「……ポカーン（。 。 ）」

私は年齢を聞いて暁然としてしまつた。

4……445歳、凄い年だ。

「まあ、俺の年はひとつでもいいとして、エヴァはひとつしたいんだ？」
「え？」

「吸血姫なんだろ？ 一箇所に留まる」とは出来ないし、バレたら人間達に何されるか分からぬ。…………ひとつある？」
「…………」

真紅狼さんの提示は私の未来を示していた。

「それに吸血姫とバレたら、エヴァを討伐するといつ輩も出でてくるだろ？」

「…………真紅狼さんにっこります」

「俺についてくるのか？」

「はい。真紅狼さんと一緒に居たいんです。…………ダメですか？」

返答が不安でしょうがないが本音をぶつけてみた。

「それなりにキツイ」となるが、それでもか？
「はい」

「分かった。よろしくな、エヴァ。あと俺の事は、真紅狼と呼び捨
てでいいぞ」

「ありがとう！ 真紅狼！！ あ、あとね、恥ずかしいんだけど……」

「どうした、改まつて？」

「ん、分かつた、キティ。…………これでいいか?」

うん / / /

「そりそり寝るか寒しから俺のコートを着て寝なギタイ」

「二度はいい」
真猿が風邪でくから
一組は寝

「 一 諸 事 題 に 一 一 顯 一 一 」

「バサツ

真紅狼は、手招きしたので私はその中に入り、一人で一緒に寝た。

暖かい。

エヴァンサイドアウト

さて、キティに生き残る術でも教え込まないとなあ。

真紅狼と吸血姫（後書き）

といふことでエヴァが仲間と言つより、家族になりました（？）
まだ、真紅狼にとってはエヴァの事を“恋人”とかじやなくて、
妹”みたいな存在としてみてますので、ご注意を。

つーか、エヴァのキャラブレイクしてるような気がする。

次回は、初戦闘だーーー！
人がいっぱい死にます。

真夜中の戦闘

「真紅狼 sides」

キティと旅を共にしてからは、魔法を覚えるよつこさせた。

俺はこの世界の“魔法”が使えないけど、FFの魔法は使えるのでそちらを覚えてもらつた。

覚えてもらつたんだが、キティの要領の良さが凄まじく泣きやうだ。

もつすでこ、『フレア』まで覚えているんだぜ？

マジで、あり得ねえって。

……これは、『暗黒魔法』を覚えさせてもいいんじゃないかな。

相性よわやうだし。

「あ、真紅狼！ 私、『アルテマ』まで撃つ事が出来るよつこなつたよー！」

「もつそこまでいつたのか……」

「ねえ、真紅狼……“いつもの”やつて？」

「ん？ ああ、ほい（ナデナデ）」

「…………」

「

“いつもの”とは昔、魔法が撃てるようになったときに頭を撫でてやつたのが、気についたらしく、それ以降出来る度にやつてあげている。

でも、撫でてあげた後のキティの笑顔が可愛いかつとも好きでやつてんだけだね。

「キティ」

「なに、真紅狼？」

「……『暗黒魔法』に興味はないか？」

「『暗黒……魔法』？」

「簡単に言えば、闇の眷属が使えるような魔法の一つだ

「ということは、基本属性は“闇”なの？」

「そうだ。あとは魔法によつて変わるな

「私、覚えてみたい！」

「じゃあ、教えよう。でも、今日はここまでにして、もう寝ようか
「うん。いっぱい覚えて、いっぱい動いたから疲れたよ」

宿……というより、無人の小屋があつたのでそこに泊ることにした。

その後ろにある岩の隙間からお湯が出ていたので、砕いて掘つたら
お湯が出て来たんだ。

だから、温泉を創つてあげた。

風呂シーンは各々、“心の眼”で見てくれ。

風呂に入った後、キティはすぐさま寝てしまつたので毛布を掛けて
あげた。

羊の毛で作られた毛布を何枚か、近くの村で譲つてもらつた。
その後、そつと抜け出した。

小屋の周りには、『マティン』と『カブトレバス』を召喚して、護
らせた。

「さて、そこに居る集団はなんか用かな？」

小屋から離れた丘でたつた俺は、下で首に十字架を下げて いる集団に言い放つた。

真紅狼 Side Story

聖騎士 S i d e s

私達は今、ある少女を追ってました。
その少女はなんでも“吸血姫”らしく、男を従えているらしい。
そこで教会は私に討伐任務を与えた。
部下や武装神父など総勢50名を連れて、出発した。
そして、その一人組を見たという目撃情報を聞いて、小屋の近く来た時、丘の上から若い男が出てきた。

「さて、そこに居る集団はなんか用かな？」

「私達は、教会から派遣された聖騎士と武装神父です！　その先に居る少女を渡して頂きたい！！」

「…………理由を聞きたい」

「理曲は、少女が“吸血姫”だからです！！ あなたも救われます

「救われる」か

「そうです！」「救われる」
神は貴方をひとつ許してください。だから、さあ

!

ーにがおかしいんですか？！」

「お前、まさか俺が少女に操られていると思ったか？」
「えの？ 悪いが断らせてもらひづぜ」

「…………、なら仕方がない。貴方には死んでもらいます」「うつ…………やつてみろ」

ノルマニテア

気が付いたら、半分の武装神父と部下たちが首を吹き飛ばされて死んでいた。

「え?
へ?
ええ?
？」

私は状況に追い付くことが出来なかつた。

その間にさらに5人の首が吹き飛んで、血が吹き出でいた。男は動いていないのに、次々と部下たちが死んでいった。気が付くと既に私一人だけになつてあり、鎧は部下の血で汚れ、血の海が出来ていた。

私はやぶれかぶれになりながら、剣を振るつたが、いつも簡単に避けられて、首を掴まれ…… 炎が私の体を焼いた。

聖騎士 Side out

真紅狼 S i d e s

「吸血姫を渡せ」と言つてきただので断つたら、思い通りに挑んでき

た。

自分たちの思い通りにならない輩は斬るつてか？

どこの辻斬りだ、お前らは。

リーダーらしき男が剣を掲げて、突っ込んできそうだったのですぐさま“鋼糸”を展開して、後ろの部下と武装神父の首に巻きつけておいた。

そして、一歩踏み出した瞬間、首を飛ばしてやった。

首からは血が噴水のように飛び出でいた。

男は「何かあったのか分からぬ」ていう顔をしていた。いかんなあ、戦場でそんな隙を見せていたら、「殺してください」って言つてゐるようなものだぞ?

そして、さらに5人の首を吹き飛ばした。

俺は銅糸をしまい、ゆづくりと男の元に歩いた。

男は叫びながら、剣を振り降ろしたが、簡単に避けられるモノだつた。

避けた後、接近していくのでアレをやつた。

「閻浮提厭淨——！」

首を掴み、地上から炎が噴き上がり、その男を燃やしつくした。

男は悲鳴を上げながら、草原に転がつていった。

「オイ、逃げるなよ。お前にはまだ役目があるんだよ」

役……田だと……？

「そ、役目。『俺達を追つたらこうなりますよ』っていつ体を張つた警告をやつてももらわないとね」

そういうと必死に逃げだそうとしていたが、俺は容赦なくある魔法を放つた。

『メルトダウン』！！

「ギヤアアアアアアあああAAAAAA！！！」

黒炎が辺り一帯を燃やしつくし、あの男の体の一部の肉体が溶けていた。

しばらく燃え続け、鎮火した後には男だった者の片腕が残つたり、武装神父や部下たちの死体が残しておいた。

「俺も寝よ

その後、さうっと帰り、キティに寄り添つて寝た。
（真紅狼 side out）

俺はあの後、『紅蓮の殲滅鬼』と言われるようになつた。

真夜中の戦闘（後書き）

様、感想有難うござります。

ご意見にもあつたんですが、“造物主”については、ちょっとしたオリジナル設定になりますのでご注意してください。

次回は“断罪者”真紅狼verが出ます。

考えていただいた、裂きやん様、ケルベルス様、読むのはいいけど様、ご意見有難うございました！！

再び『魔法世界』へ・・・

「エヴァ sides」

どうも、こんにちわ、エヴァンジェリンです。

真紅狼と旅を続けてから、もう5年が経とうとしてます。

最初は“吸血姫”的特徴が嫌という程出てきました。

定期的に“血”を吸わないといけなかつたのを真紅狼が受け持つてくれた時は最初は嫌だつたけど、真紅狼が「吸わないで、キティが発狂する方がもつと嫌だ」と言ってきたので甘えることにしました。それから一年が経つと吸わなくとも過ごしていけるようになり、だいぶこの体にも慣れてきました。

あとは、真紅狼の秘密も知りました。

真紅狼は元々“転生者”みたいだつたらしく、別の世界で暮らしていたところを神様に殺されたらしいんだつて。

「それなりの“理由”があつたらしく、しづがなかつた」ついう風に言つてた。

さらに、ここ最近は教会の人達の追撃がなく、自由な暮らしが出来てます。

今は、真紅狼の家に向かつてます。

なんでも、極東にあるそうです。

「まあ、ここだな」

「ここは土地全部が真紅狼のなの?!」

「貰つたんだがな……」

「お家、大きいね！！」

真紅狼の家はとても大きかつた。

目の前に見える、お屋敷が客用だと知った時は、空いた口が塞がらなかつた。

そして、しばらくの間だいたい300年ぐらじで住み、その間私もだいぶ強くなつた。

300年後・・・・

真紅狼に教わつた『暗黒魔法』も全て覚えたし、魔法は一部の魔法のみ全部覚えた。

ん？ 口調が変わつてゐる？

300年も経てば、変わるものだ。

最近、真紅狼が『『魔法世界』』に行こうかねえ…………と呟いていた。

『魔法世界』か……、話では何度か聞いていたが、どんなものか興味はあるな。

そうだ、聞いてくれ。私は真紅狼に教えてもらつた『暗黒魔法』を『兵装』として、取り込んで戦う術式……『闇の魔法』を創つたぞ。

真紅狼にも使って欲しかつたが、まあ、『使えない』ので諦めた。

「真紅狼」

「なんだ、キティ？」

「あまりその名で呼ばないで欲しいんだが、まあいいか。話はいきなり変わるんだがいいか？」

「おつ」

「『魔法世界』に行つてみたいんだが……」

「『魔法世界』に？」

「そうだ」

「奇遇だな、俺も行こうか迷っていたんだが、キティが行きたいなら行くしかないな。ということで準備しろ」

「分かった」

そうして、私達は『魔法世界』^{ムンドウス・マギクス}に行くこととなつた。

「エヴァ side out」

「真紅狼 side」

キティが『魔法世界』^{ムンドウス・マギクス}に行きたいと言つてきたので、行く準備をした。

「準備はいいか？」
「ああ、いいぞ」
「さてと、来い！　『ケーツハリー』……」

ケーツハリーを呼び出し、飛び乗つた。

そして、飛び乗る前に例の如く、封印を張り直しておいた。

今回はグレートブリテンから行く方法にした。

麻帆等からでも“ゲート”はあるんだが、アレはあちら側から開いたので行けたがこちらからではまだ無理だ。

そして、向かう最中に……

「あ、キティ。向こうの世界に行つたら、無闇に力は振るわない事な？　めんどくさいことになるから」

「何故だ？ そちらの連中に負ける筈がないのに……」

「向こうの世界では“悪者”ってのは若い者にとっては自分の名を上げる為に良い餌だからな。そこに俺達が行けば……どうなるか、分かるな？」

「なるほど……。私達が行けば、それなりの悪名があるからすぐに戦いついてくる？」

「そういうことだ。出来るだけ相手を威圧させていくよつな戦い方法を見つけてくれ。俺もそうするからさ」

「分かった」

「さて、着いたな。あとは“ゲート”まで歩くだけか……」

「ブを被つとけよ？」

「そういう真紅狼も仮面付けておくんだな」

「ハイハイ

俺達はそれなりに『悪名』が高い為か、行く先々で戦闘が起きたりしてゐる。俺達はそれなりに『悪名』が高い為か、行く先々で戦闘が起きたりしてゐる。

その為か、変装することで無用な戦闘を避けていた。 がバレるものはやはりバレる。

しかも、その俺達の異名の名が『魔法世界^{ムンドウス・マギクス}』に流れている可能性があるんで、注意を払っていた。

とまあ、“ゲート”についた時にはちょうどいいタイミングで転移し、だいぶ新しくなったメガロメセンブリナに着いた。見てみた感想は、なんというか将来の上海みたいだな。

「さて、Hガア。」こちらの拠点に向かうか

「そんなどころあるのか？ 紅赤主（変装時の呼び名）

「あるぜ、普通の人じゃ入れねえ場所にな

その後、メガロを出た俺達は少し離れた場所で再びケーツハリーを呼び、ケルベラス大森林に向かった。ちょうど、城の真上だったのでそこで降りて、ケーツハリーは魔石に戻った。

「こじが俺の城だ」

「こじが真紅狼の城……」

「壁とかは自然が作ったものだから、おいそれとは壊されないし、この奥まで来るのに他の猛獸を避けなきやならないから、まず人は来ないとと思うぞ？　来るとしたら、俺達を討伐しに来たアホ共、ぐらいか……」

「そんなことを言つていいたら……」

『その中に居る、 “紅蓮の殲滅鬼” に “闇の福音” 出て来い！』

なんてことを言われた。

「真紅狼、早速来たようだぞ？」

「これが “フラグ” つてやつか……チクショウorraine

「真紅狼はなにでいく？」

「俺は……この “真紅の執行者” で行くか」

クリムゾン アドミニスター

右腰のホルスターから銃身は銀でさらに牙を剥いた狼の彫刻が彫つてあり、色は真紅、眼は水晶になつていて、水晶は撃つ弾丸によつて色が変わり、彫刻も変わる。

眼の水晶は黒になり、魔力弾時は牙を剥いた狼で実弾時は口が閉じた狼で眼は黒になり、魔力弾時は牙を剥いた狼で眼は蒼になる。

銃のタイプはリボルバー仕様でこれも実弾と魔力弾ではリロードの仕方が変わる。

実弾時は、空の薬莢を抜くだけで自動的にセットされる。

魔力弾時は、薬莢を抜かなくても、空になつた薬莢に撃ちたい魔法を込めれば良いので連射能力がとても高い。

「私は、『暗黒魔法』を放つか
「威力抑えるよ?」

「分かつていい、課題の一つだからな」

俺が教えた魔法は全て詠唱が無い。

その為か、常に全力で放てる状態だとすぐに氣を失つてしまつので少ない魔力で放てるように課題を出した。

そして、今も課題に取り組んでいた最中だ。

『さつと出て来い！ 出てこないと大規模魔法を放つぞー？』

お客様さんが痺れを切らしかけているので向かう事にした。

「少し黙れ、バカ」

「全くだ」

「へへつ、俺達に恐れを成して、震えていたと思つたぜ！」

と、まあバカが吠えてます。

敵はだいたい2、30人で雰囲気からして『自分たちは強い！』と思いつ込んでいるバカ共だった。

「やる気しねえ…………が、何度も来られても迷惑だから、追い払うか」

「準備はいいが、紅赤主？」

「いつでも」

「では…………『ヘルウィンド』……」

「！？ 全員避ける……」

前に居た数人はかるうじて避けることが出来たが、武器が石化して
いた。

その後の後ろに居た数十名は避けることに失敗し、中途半端な魔法
障壁を張っていたので、一瞬で石化するよりも悲惨なことになつた。
右または左半分だけ石化された者、下半身が石化した者、首だけ石
化した者と酷い状態だった。

エヴァはそのまま『サンダガ』や『ブリザガ』を片つ端から放つて

いた。

俺もやらないと……

ふむ、『カオスドライブ』装填！！

装填！

デノン デノン デカノン

三発の魔力弾が生き残った者達を追撃する。

「そんな弾、簡単に避けてやるー！」

男たちは避けて、こちらに向かつてきていたが男たちは知らなかつた。

かける”ことを。

事実、後ろから向こう側にいつてしまつた弾が戻ってきていた。

ダーウィン・・・・

ようが対象に当たらない限り、止まらないんだよ。まあ、弾自体を消せば、逃げられはするがな」

「真紅狼、コイツ等はどうするんだ？」

コイツ等は先程『カオスドライブ』をふんだんに浴びている為、体が麻痺していた。

「ちょっと離れた場所に放り投げとけ。痺れがとれれば、逃げるこじが出来るし。出来なかつたらこの森にうろついてる猛獸たちに喰われるだけさ」

聞こえるように話すと、男たちは震えだしたが俺はそんなことは知らない。

“クリムゾンアドミニスター”
真紅の執行者をホルスターに戻して、まだ生き残っている15人を出口に近い森の方に放り投げた。

「さて、バカ共一掃できたし。休むか」

「真紅狼」

俺の名を呼び、「ジーー」とこちらを見ていた。
ああ、アレね。

「ん…………（ナヂテナヂテ）」

「～～～」

「…………寝ますか

「つむー」

そうして、『マンドゥス・マギクス魔法世界』の初日が終わった。

～真紅狼Side out～

どうやら生き残った者が居たらしく、ケルベラス大森林は別名“鬼の棲む森”と魔法世界に広まつたらしく。

再び『魔法世界』へ・・・（後書き）

そろそろ、魔法大戦にはいろいろかな～～と思つてます。

そして、エヴァは『闇の魔法』を習得。
これは一つの“術式兵装”があります。

一つは“ネギま”の術式兵装。もう一つは“暗黒魔法”的術式兵装です。

基本的に性能とかは同じですが、追加効果が違うだけです。

そして銃の名前が決まりました。

考えててくれた裂きやん様、ケルベルス様、感謝します！

名は“真紅の執行者”です。

お次に性能は読むのはいいけど様が考えてくれました。
少しばかり、いじりましたがほぼ一緒です。

「真紅狼 sides」

うい、真紅狼だ。

最近寝ていると、キティが潜り込んでいて対処に困つてゐる……といふのか？

キティ曰く、「真紅狼は暖かいから、一緒に寝たい」とのことだ。先程、上で「困つてゐる」と言つたが、俺も寝ている間にキティを抱き寄せて“抱き枕”にしてるのでお相子だと思つてしまつ。

そして、最近は噂が広まつたせいかバカ共の対処が一層めんじくさくなつた。

さらに、遠い地から魔族やら亜人どもが「俺達の主になつてくれ！」と頼み込んでくるから、丁重におかえりしてもらつてゐる。つーか、魔族が人語喋つてんのにびっくりした。

「ンンンン・・・

畜生、またか。

ゆつくりとベッドを抜け出し、入口に向かつた。

「はいはい。どちらさまですか？」

「やつぱり、真紅狼さんですか！ 帰つてきてたんですねーーー！」

「えーと、どちら様で？」

そこには爽やかそうな青年が立っていた。

「あ、この姿じゃ分からぬですよね、ちよつと外に出でへださい
ん、ああ。……この姿？」

そう言つて一人は外に出た後、青年は姿が変わっていた。
なんと、竜だつた。

「お前、俺を乗せてくれたあの若い竜か！？」

「……グルウ」

「え？ なんで言葉喋つてんの？！ つーか、人の姿に成れんの！
？」

「だつて、あれから500年経つてるんですよ？ ふとしたきつかけで出来ました」

「え、マジ？」

「マジです。ちなみにこの森に居たあの当時の猛獸たち、今皆違つ種族と結婚してます」

「ハア！？」

本日驚愕一回目。

「え、じゃあ、何？ 俺以外、全員妻帯者？」
「ええ、居ないといつたら新しく入つて来た若いヤツラがいるのです
かね」

「え、ちょっとさあ、洒落にならんがな!」

「真紅狼さんも結婚したらどうですか?」

「やかましい! 僕が今なんて言われてるか知つてんだろー?」

「ええ

「知つてて言つたのか? ! ああー! ?」

「はい(笑)」

「リア充、爆発しろ」

「まあ、今回は挨拶とかだつたのでこれで失礼しますね~」

「一度とくんな

「だが断る!」

バタンッ!

城の扉を思いつきり叩きつけた。

俺以外全員結婚してんのかよ。

なんだ、この虚しさは。

気分を紛らせる為にキティを抱き枕にして一度寝をしよう。

→ 真紅狼 side out

→ エヴァ side

目覚めてみると、真紅狼と密着した状態で寝ていた。

また、真紅狼は私を抱き枕にしたのか……

まあいいけどね。

というか、体をぎつちりと抱え込んでいるせいか抜け出せない。

真紅狼の方を向くと顔が目の前にある。
少し動けばキスが出来る程近かつた。

・・・・・・・・・・・・

キスぐらい、してもいいよな？

といつより、ファーストキスは真紅狼以外は絶対しない。
いや、それよりも今してしまうか。

真紅狼は寝てるし、まともに見ながらやるなんて私には無理だ／＼

／＼

「（起きるなよ、真紅狼）」

あと一回つてところで真紅狼は突然眼を覚ました。

「……………」
「何やつてんの、キティ？」
「…………キスをしようとしてた」
「それは唇か？ ほっぺとかじやなくて？」
「…………唇／＼／＼」
「キティ」
「なんだ、真紅狼？」
「結婚すつか」
「え？ ええ？！」
「いや、だつて俺達もう長い間一緒に居るだろ？ 結婚してもいい
ぐら～って言う程共にしてるし」

確かに……。

真紅狼とはもう305年の付き合いだ。

秘かに私も真紅狼との“結婚”は考えていた。だが、言いだせる機会とそこまでの信念が無かつた。だけど、真紅狼から言つてきてくれた。

「真紅狼はいいのか？」「私でも？」

「それはこっちのセリフだ。といつても切りだした本人が言うのも
変か」

エヴァン
s i d e
outs

真紅狼 Sides

結婚しました。

名前とかはまたあとで考へる」とこした。

「真紅狼、この世界を見て回りたい」

と上目づかいで見てきた。
ヤバい、これは最終兵器だ！！！

「じゃあ、明後日から見て回るか

と速攻でOKを出した。

その後は一人で一緒に寝た。

いつも通りだと思う奴もいるかもしれないが、言つておくがお互い

“全裸”で寝てるからな？

～真紅狼 side out～

寝顔はやっぱり可愛いなあ。

驚愕の新事実・・・（後書き）

また、すつ飛ばしますが許してください。

あと、数話でナギ達登場します。
登場すれば、魔法大戦開始です。

（真紅狼 sides）
うい、真紅狼だ。

いつも通り、キティとは仲良く一人で寝てるよ。

今日はこの魔法世界を見て回る日なので、いつもよりも早く起きた。
いつもなら大体、午前11時ぐらいに起きてるんだが、今日は9時

起きした。

「真紅狼！ 早く行こう！」

「はいはい

俺はパパッと軽く掃除をした後、城を出た。

そしたら、この前会ったエイビスが居たので声を掛けた。

「エイビス

「なんですか…………って、こちらのお嬢さまでしょかして、『闇の
福音』ですか？」

「ん？ ああ、良く知ってんな

「そりや、私達、週に一回は街に出かけてますからね。その時に情
報を耳にしたんですよ」

「街まで行つてんのかよ……」

「で、今日はどうしたんですか？」

「ああ、エヴァが魔法世界を見て回りたって言つから、ちょっと
旅行に行つてくる」

「分かりました。ちゃんと城は守つておきますよ

「悪いな。俺達を討伐しに来た魔法使い共が来たら、たっぷりと出迎えをしてやれ」

「ええ、それはもちろん。フルコースでお出迎えですよ」

「これは…………死んだんじゃなかろうか？」

まあ、いいや。

放つておこう。

「じゃ、行つてくる

「いってらっしゃい

そうして俺達はケルベラス大森林を出て、まずはヘラス帝国に向かつた。

（真紅狼 side out）

（エヴァ side）

今日は待ちに待つた、世界旅行の日だった。

だから、私は早く起きて準備した。

そして、まず向かつたのが世界で最も大きかつた国、ヘラス帝国を

目指した。

まだ、この当時はそれほど殺氣だつてなかつた。

この国は基本的に亜人や獸人と言つた人間がいない国だつた。

連日、お祭り騒ぎで喧しがつたよ。

そこから、数十年掛けて他の国々や都市を回り見た。

真紅狼はその行く途中で、龍やら魔獣やらに仲良くなつていたがな。メガロメセンブリナに着いた時には、すでに130年経つていたよ。そして、メガロメセンブリナのホテルに突然、来訪者が来た。

『スミマセン、こちらは“紅赤主”がいる部屋でしょうか?』

「ああ、どちら様で?」

『メガロメセンブリナの移住担当係の者です』

「まあ、中に入ってくれ」

『失礼します』

「で、要件は?」

「单刀直入にいいますと、貴方様が持つてゐる旧世界の“麻帆良”と言つ土地に「魔法使い達の都市」を創りたいんですが、許可を貰いに來ました」

「……別に構わないが、条件がある」

「何でしょうか?」

「一つ、あくまでも“俺の土地の上”に建てるという事を忘れるな? 俺があそこの土地の所有者だからな。」

一つ、俺達をメガロ所属にしないこと。俺達は“フリー”の魔法使いだ、どちらも所属はしない。

最後に、俺達を余計なことに巻き込むなよ? それさえ守ってくれたら別に建てても構わないぞ」

真紅狼は多分、「飛び火を受けたくないし、帰つた後の面倒を背負いたくない」からこの三つを言つたんだろうな。と私は思った。男は「分かりました」と言つて、帰つていつた。

その後、メガロには2週間程滞在し、最後にオステイア王国に向かつた。

オステイア王国はどうやら天然の魔法で浮いてる土地の上に国があるみたいだった。

私が言うのもアレなんだが、歴史を感じるよつた古都だった。

ここ、最近南のベラスと北のメガロの小競り合いが増えていて、小規模な戦争が起きていた。

私達も巻き込まれたが、真紅狼がそいつらに向けて殺氣を放つて、気絶させて強制的に終息させた。

それ以来、北の連合と南の帝国には“注意人物”と認識されたらしい。

「真紅狼」

「んー？」

「そろそろ宿を探そう」

「そうだな、そうするか」

「そう言えば、色んな国の食事をしてるけど、やはり真紅狼が育つた国の食事が一番だつたな」

「エヴァは日本食好きだね」

「だつて、美味しいからな」

「帰つたら、また創つてやるよ」

「約束だからな？」

「ああ、約束だ」

そうして、宿も無事に見つかり、その日のオステイア観光を私達は終えた。

（エヴァ side out）

そして、俺達が次の日、朝目覚めると、ヘラス帝国が今まで小規模な戦闘が大規模な戦闘に変わり、第一次魔法大戦が始まった。

魔法使いの街（後書き）

すみません、バイトで忙しく、投稿できなかつたです。
もう一話、この後上げます。

魔法大戦、勃発（前書き）

さあ、魔法大戦の開幕です。

魔法大戦、勃発

（真紅狼 sides）
ドゴォ――ン!!

目覚めると、いきなり轟音から朝が始まった。
外を見てみると、ヘラス帝国の艦隊が精霊砲をオステイアにぶつ放
してた。

「何事？」
「う～～ん、うるさくてかなわん」
「まつたくだ、取り敢えずキティ。着替えよつな」
「ああ」

俺とキティは着替えた後、部屋を出て、近くの人に状況を聞いた。

「すまないが状況を教えてくれないか？」
「状況もないさ！ 帝国が突然攻めて来たんだよ!! アンタ達も
早く逃げな!!」

ヒュ～～、ドシ――ン……

空からなんか降つて来た。

つて、鬼神兵かよ。

ん～～、この戦いは俺達には関係はない…………、が――！

ちょっとつるさいのでハ当たりしてこよひ。

そうして、準備をするとキティも俺がしようとすることが分かったらしい。

「真紅狼、やるんだろ?」

「よくお解りで……」

「私は真紅狼の……つ……妻だからな／＼／＼

顔を赤くしながら言つキティ、ああもう可愛いなあ。

「取り敢えず、艦隊とかその辺を叩き落とすぞ?」

「分かった」

俺は魔力を足に込めて空中に足場を造り、キティは浮いた後、『闇の魔法』で自身の身体強化を行つていた。

俺は、全身に『剣』を通して、鋼糸を展開した。

「じゃあ、行くぞ――！」

俺とキティはたつた一人でヘラス帝国の艦隊に喰いかつた。
／真紅狼Side out／

～エヴァ sides～

轟音の後、真紅狼は窓の外を見ていた。

多分、ちょっとかいを出すな、これは……

真紅狼は機嫌が悪い時にその原因を作った奴を見つけると、本人は気が付いていないが嗤っているのだ。

その時はたいてい、そいつ等が酷い目に遭うんだがな……。

それ故か、私はこの後の行動に予測がついたため、準備をした。

「真紅狼、やるんだる？」

「よくお解りで……」

そりゃ分かるものだ。
なんせ私は今……

「私は真紅狼の……つ……妻だからな／／／

……やはり、口に出して言つるのは恥ずかしいな。

その後、真紅狼に教わった『暗黒魔法』の一つ、『ダークフレア』を取り込んで、身体強化を図つた。

この“ダークフレア”的特徴は“相手の魔法障壁、または物理障壁を突破して直接、本体に攻撃を叩き込むことが出来る”のが主な特徴で、H.I.T時に爆発が相手を襲うことだった。
これで、艦隊の障壁など関係なく、叩き潰せる。

そして、私達は帝国に喰いかかった。

「エヴァ side out」

「真紅狼 side」

俺はまず、地上で動いてる鬼神兵一体を相手にした。

キュル……ピンッ！

鋼糸で編んだ杭を鬼神兵のど真ん中に刺した。

ドスンッ！

「グオオオオ！？」

鬼神兵は突然の攻撃に悶えながら、刺さつてる杭を抜こうとしたので俺は鋼糸で編んだ杭を手で解いた。

天剣技
“繰弦曲 跳ね虫”

ズバババババア・・・・・・

手で解かれた鋼糸は鬼神兵の体内から切り裂かれて、バラバラとなつた。

「！？」

帝国の艦隊の一つがこの現象を見て、驚愕した。

鬼神兵は俺を掴みかかつて来たが、動きが鈍い為、いつも簡単に避けることが出来た。

その後、もう一匹の鬼神兵の周りに鋼糸を巻き付け、そのまま絞め潰した。

グシャ・・・

先程まで地上を制圧していた鬼神兵が、たつた一人の男の攻撃によりひっくり返された帝国は艦隊を真紅狼の方に向けた。
その時、横つ腹から強烈な爆音と衝撃が襲つた。

バゴォン！！

グシャ.....バキベキ！！

ボォン！！

キティが横蹴りを放つたのが分かつた。

「おーおー、暴れてんなあ

キティはすでに巡洋艦を一機、駆逐艦を一機潰していた。だが、後ろにはまだ巡洋艦が五、六機あったのでめんべくへなつてきたので、召喚獣を出すことにした。

「ヒガア、戻つて来い！！」

そう叫ぶと、空中で敵の攻撃を回避していたキティは俺の元まで戻つて來た。

「紅赤主、どうかしたのか？」

「後ろにまだあんなにいるから、一気に潰すよ。あと、凄いモン魅せてやる」

「ほう、それは楽しみだ

「俺より前に出るなよ？」

「うむ

さて、じゃあ、やりますか！－

『戦場の戦神よ－ 今ここに来れ！－ 汝、我に仇なす者たちを剣にて両断せよ！－ 来い！ 戦神 オーディン！－』

その後、帝国艦隊の前に急に崖が出来た。
その時、突然馬の鳴き声が聞こえた。

ヒヒイイン！！

帝国艦隊は動きを止め、第三者の方に向いていた。

そこには鬼神兵と同等の大きさを持つ、騎士がいた。

馬は「行くぞ！」と言わんばかりに足を上げ、そして、崖を下った。

ガラガラガラ
ドンッ！

スレイプニールは主を乗せて、敵の元まで駆ける。そして、オーディンは帝国艦隊をすり抜ける瞬間

一閃！！

“斬

鉄

劍”！

オーティンはすでに消えており、塵も消えていた。

帝国艦隊はしばらくしてから、全て真つ一つに斬られて瓦解した。

「おお～～～！ カッコいいな～～～！」

「だらお？」

「私も呼べるのか～～？」

「呼べるんじやないか？ 今度やつてみるか～～？」

「ああ～～！」

二人が空中で喋っていた間、下の王国では戦闘に勝つたことを喜び、この戦いの殊勲者である一人を探し始めた。
だが探しても見つからず、噂話が国中を収まることなく、世界に広まつた。

こつして、帝国はオステイア攻略に失敗した。

～真紅狼Side out～

その後、俺達は姿を変えていたのでバレることなく、静かに過ぎた。
だって、遠くからで姿がぼやけていたしね。

魔法大戦、勃発（後書き）

召喚獣エフエクトはFFCCでお願いします。

召喚獣の詠唱は出来る限り、創ります。
もし「こんなのを考えた」ということがありましたら、感想にてお
送りください。
お待ちしております！

真紅狼と王女と姫巫女と組織

「真紅狼 sides」

最初の戦いからもう95年も経つてるよ。

それなのに戦争は終わらないよ、よくやるね本当に……
お互い、いい年ですよ。

俺は975歳、キティは510歳。

あの戦いの後、ちょくちょくと帝国は攻めて来てるが、前の戦いで
警戒心を持つたらしく、艦隊では攻めてこなくなつた。

むしろ、魔法攻撃が主力になつて来た。

あの時はひるさかつたので手を出したが、ここ最近は手を出しては
いない。

というより、手を出す前に魔法攻撃がなんか勝手に消滅して
周りが大森林で囲まれた湖の塔に当たると、必ず消える……。

「…………真紅狼、あそこ何があるんじゃないか？」

「…………行つてみるか」

『バニシユ』

自身を透明にして、背景と同化することが出来る魔法だ。

潜入とかに超便利。

ただ、物音とかは消えない為、完璧とはいえないが……まあ、問
題は無いだろ。

バレたら、『サイレス』掛けちまえばいい。

と言つわけで、塔の最上階まで来たんだが………女の子が居た。

女の子が居るのにはなんら問題は無いんだが、ただ 異様だつた。手足を鎖で繋がれ、下には何かの魔方陣が書かれており、最悪なのは自我が微かにしかない。

「…………ダ……レ……？」

「！？ 真紅狼、魔法が解けてるぞ？！」

「え、ウソー？」

自分の体を見てみると、透明になつていた筈の自分の体が見えている。

「コイツ、まさか完全魔力無効化か！？」

「とこ、とこ、この子が今オステイアで蹲されていの、『黄眉の姫巫女』か……」

この子がねえ、『ライブラ』でこの子を見てみると、なんか色々と薬を飲まされている。

認識阻害とか年を取らないよつこ、成長を遅らせたりする薬とかが検出された。

「…………アナ……タ・タチ……ハ……ダレ？」

俺の名が覚えてくれるかどうかは怪しげが、一応名乗ることにした。

「俺の名は蒼騎
真紅狼だ」

「私の名はエヴァ・ジエリン・A・K・M・蒼騎だ」

「ナニの外で？」

一
二
三
四
五
六
七
八
九

下から「足音が聞こえてくる」よりも結構な数だ。

二、三人なら『サイレス』で対応できるんだが、数十人なら去つた方が無難だな、これは…………。

「アスナか、覚えたぞ。 いずれまた助けに来てやる。 それまで俺達の名を忘れるなよ?」

卷之三

Page.....

俺は鋼糸を適当な建造物に巻き付けて、キティを抱え込んで逃げ、途中で『バニシユ』を掛け直した。

「……」まで来れば大丈夫だろ」「……いいのか、真紅狼？」
「何をだ？」
「本名を教えてしまつて……」
「キティだつて、教えてただろ？」「
真紅狼が言つたなら、私も言わなきゃマズイだろう？」

「さて、帝国が陸から攻めて来れないよつてある噂を流すか

「……噂？」

「ヘルスとオステイアの間に砂漠があつたろ？ そこにはアイツが居るからな……。商人を伝つて噂が広まると思つぞ？」

「ああ、アイツか」

砂漠に奴が居たんだよ。

うん、アレはみんなビックリすると思つ。

（真紅狼 side out）

（？？？ side）

今、オステイアとヘルスの間を通る者たちの間ではある噂が流れている。

その噂とはじめだった。

旅の商人の間で、ひとつ噂があつた……

「地より出ずる水晶には、近づくな

しかし、「それは強欲を戒める教訓のようなもの」だとある者が言つた……

誰もがそう思っていた。

だが、それを無視した商人たちは、その水晶を手に入れようと砂漠に出たまま帰つてこなかつた・・・

唯一、生き残つた者が途絶えながら遺言を残した・・・

「水晶を尻尾にした巨大な蠍が出た」

それを聞いたある者はこう名付けた。

“**尾晶蠍**”と。

アクラ・ヴァシム

という噂が流れているのじや。

本来なら、このような魔獸（？）は討伐するべきだが、こやつが砂漠に居る為かヘラスは陸から攻められないのもまた事実であり、頭

を悩ましておる。

「アリカ～、お忍びでお買い物に行きましょ」?

「まだですか、姉上?」

姉上のアルマは妾が難しい顔をしても、気を紛らすことをしていく
ことがあることが多かった。

姉上なりに気遣ってくれて『いるのが嬉しかった。

「だけど、たまにはいいですね」

「じゃ、行きましょうか」

「つむ」

そうして、上手く衛兵の目を盗んで外に出た。
しばらくはそれなりに楽しめていたが、途中から後ろに怪しい奴等
が付いてきたのが分かり、姉上を先に帰らせた後、私は一人路地裏
に入った。

「お主たち、何者じや?」

「……答えるつもりは無い。貴女はウェスペルタティア王国、次期
継承者第一王女のアリカ・アナルキア・エンテオフュシアか?」

「そうじや……」

「悪いが貴方には死んでいただく」

妾はその言葉を聞いた時、後ろに下がるつとしたが……すでに敵が回り込んでいた。

「では……」

ヒュ～～～、ドガアアアアアーン！！！

リーダーらしき男が手を上に上げると周りの者達が襲いかかって来た。と思ったら、何者かに燃やされながら吹き飛ばされていた。

必定！！！

• •

乱入して来た男は答えることなく、リーダーらしき男の方を見てい
た。

「いや、まさか！ 貴様は“紅蓮の殲滅鬼”！？」

“紅蓮の殲滅鬼”と言えば、一時の間、賞金稼ぎの間では噂されたいた男ではなかつたのう？

「……………（ガシツー）」

「ぐつ！ 離せ、貴様！！」

「…………貴様等は何者だ？」

「誰が…………ぐう！？…………答えるかーー！」

「…………答えなければ、先程の様になるが？」

「『完全なる世界』だ」

「…………組織名だな？」

「そうだ。言つたんだから離せーー！」

「…………（ブンツー）」

“紅蓮の殲滅鬼”は男を放り投げ、妾を一通り見た後去りつとした。
なので、疑問をぶつけることにした。

「何故、賞金首の貴様が妾を助けた？」

「……………」

「黙つていないで答えよーー！」

「…………きまぐれだ」

「そつか…………助けてくれたことに感謝する」

「……………王女よ、護衛も付けずに勝手に出歩かない
ことだ」

「忠告感謝する」

「……………フン」

そう一瞥し、とんでもない跳躍力で去つていった。

“紅蓮の殲滅鬼”と言わて割には、何故かはわからんが優しい感

じじゅつたな。

「姉上が心配しておるし、早く帰らなければ」

そうして、姿を隠しながら、城に戻った。

「アリカ side out」

「真紅狼 side」

噂を広めた後、オステイアの屋根の上で休憩しながら、周りを見て
いたらある一人に目が付いた。

なんと、この国の王女である、アルマ第一王女とアリカ第一王女が
姿を変えて街に護衛も付けず出ていた。
最初はただのお忍びかと思っていたので気にしなかった。

「真紅狼、何を見ているんだ?」

「いや、この国の王女たちがお忍びで護衛も付けずに街に出ている
のをみて、度胸があるな。と思つてね」

「どの辺だ?」

「あそこで賑わっているところ」

そう言って指を指した。

「よく見えるな……私には若干ぼやけてしか見えない。……おい、
真紅狼」

「……ああ、集団で付けてる奴らが居るな

「お、一 手に分かれたな」

「集団は、路地裏に行つた方を追いかけたな」

「どうするんだ、真紅狼？」

キティは答えが分かりながら、意地悪く聞いてくる。

「いいか、キティ。これは居心地が悪くなるだけだからなー…？」勘
違いするなよ！？

「はいはい、分かつてるとよ」

「旦那モ素直ジャネーナ」

「つるせえよーー！」

とキティの隣で声を出してきたのはチャチャゼロである。
このオステイアに来る前にケルベラス大森林の隠れ家で創つてたら
しく、キティの従者でもあるらしい。
魔法は使えないが、暇な時に俺と戦闘していった為か剣術とかその他
諸々が色々と強化されてる。
ちなみに俺もちょっとした特殊な武装を作成した。

特定の敵のみにはとてつもない効果を發揮する武器だよ。
しかし、そろそろ俺も契約しようかね。
もちろん、キティとだが……。

ちょうど、アリカ王女の後ろに居るローブやら黒い服の男たちが
軋間のラストアークをぶつ放した。

「断獄

必定……！

「

当たった者達の血が飛び出たが、そんなモノ俺の炎で全て蒸発した。
その後、生き残った男から情報を聞き出した。

『完全なる世界』ね

また一癖も二癖もありそうな組織名だな。

後は掴まれている癖にやたらと調子に乗ってるバカを思いつきり放
り投げ、帰ろうとしたら、案の定アリカ王女が問いただしてきた。

「何故、賞金首の貴様が妾を助けた？」

見てました。なんて言つたら深く聞かれそุดだから、まあ……

「……まあぐれだ」

「いつ答えておけば、深くは聞かれないだらう。」

「じゃあ、失礼する。これでも賞金首なんだ、長居はしたくない。
それと護衛も付けず勝手に街に出るかないことだ」

「忠告感謝する」

忠告で言つたつもりはないんだがな……

バキンッ！

そうして、再びキティの元に帰つた。

「ただいまー」
「おお、おかえり」
「旦那モ ヨクヤルナ」
「さいですか……。帰るか」
「そうだな」

今日の出来事が遭つてから、俺の賞金首はさらに駆けあがり、3000万ドラクマに跳ね上がつた。

それと、オステイアの国中にまた噂が流れた。
なんでも“アリカ王女には想い人がいる”なんて噂らしい。
動きにくくなつたなあ。

／真紅狼 side out／

その一週間後、第二回オステイア攻略が行われた。

真紅狼と王女と姫巫女と組織（後書き）

次回はナギ達が登場！…………多分。

ラカンとかゼクトとかガトウ達の出会いにはカットです。
申し訳ないです。

ちなみにチャチャゼロはまだ100歳ぐらいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7264y/>

新 “ネギまと転生者”

2011年12月1日17時46分発行